

# The Gallery voice

NO-54

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2013.5.11  
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haeburucho Okinawa Japan www.galleryokinawa.com

## 遠方＝冥界への回帰

佐藤文彦

私の沖縄移住 40 年の節目にあたって、「失われたものを求めて」という個展を画廊沖縄で企画していただいたことは大きな転回軸となる。

思い起こすと、移住当初の小学 3 年から沖縄体験をし、いつからかウチナーンチュになっていたが、私の故郷は祖父母のいる東京であり、東北の宮城であった。私は幼少時より漫画やテレビのヒーローを描くことが好きで沖縄でも級友たちがほめてくれたことが私の道を決定づけたように思う。中学 3 年になって、将来は美術学校へ進むつもりでデッサンと油絵を習った。先生は当時首里高校で教鞭を取っていた美術家の喜村朝貞氏で、私にとって絵画における最初の恩師である。その後、専門高校で喜久村徳男氏をはじめ多くの先生の指導を受ける。さらに画塾ペンとはうすを主宰していた真喜志勉氏の指導を受け、1986 年に開学した沖縄県立芸術大学の一期生となった。その頃沖縄は本土復帰、海洋博を皮切りに大規模な開発とそれに伴う自然破壊などがあったが、それを目の当たりにした私は、大学在学中「失われゆく沖縄」を制作テーマとした。このテーマは、本土復帰と共に日々失われてゆく沖縄の風景と精神性の両面を描くことであった。沖縄の原風景を求めて八重山諸島、与那国島、宮古島、伊是名島、伊平屋島の祭祀を体験したのは大学後半のことである。その島々での祭祀を見て徐々に沖縄の基層文化の深層に触れ大きな衝撃を受けた。この衝撃をキャンパスにぶつけ御嶽や墳墓などをモチーフにした作品群が生まれた。

1990 年、東京藝術大学大学院在籍中、期待していた 12 年に一度めぐってくる久高島のイザイホーが中止されたことを知り驚愕したことを覚えている。同じ思いを抱いた研究者や前述の喜久村先生、音楽家の喜納昌吉氏などが島へ行き儀式存続の説得に出向いたそうだが、祭祀の根幹である神になるべき島の女性がそろわない限りイザイホーを行うことはできないと説明され、それ以来現在に至るまでイザイホーは再現されていない。暦の上ではイザイホーの行われるべき日に、祭祀復活を熱望していた喜納氏がイザイホー再生を祈るスケールの大きい祭りを、久高島を眺望する知念半島の突端で実施したことを聞き少なからず刺激を受けたが、私自身もすでに東京でイザイホーをテーマに作品化していた。同時に、私にとって運命的邂逅ともいえるべき鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』（1982 年、岩波書店）と出会った。その書には戦火で灰燼に帰した文化財のモノ

クロ写真が数多く掲載されており、その中に歴代琉球国王の肖像画「御後絵」の写真もあったのである。「御後絵」は、沖縄戦で行方知らずになった幻の絵画である。博士論文のテーマを探していた私は、「失われた沖縄」の一つとして「御後絵」の色彩再生と歴史的背景の研究に挑んだ。

ところが、現代美術の先端的人材を輩出する東京藝大油画科では、この制作は時代錯誤だと一蹴され、モノクロ写真の形を線で起こし任意の色彩を施す私の制作手法に対しては「ぬり絵」だと笑うものもいた。

しかし、屈せずに貫くことができたのは、子ども時代から見続けてきた沖縄への強い情念があったからではないだろうか。



「七代尚寧王」 綿布に和紙と絹、アクリル絵具・顔料162×174cm 1995年

1995 年、鎌倉が残した 10 枚の写真のうち 8 点の「御後絵」を制作、あわせて、論文『琉球国王肖像画（御後絵）再生の現代的意義』で博士の学位を修得した私は、縁あって母校沖縄県立芸大の助手として赴任した。その後、残りの 2 点の肖像を制作、2003 年には『遙かなる御後絵—甦る琉球絵画—』（作品社刊）を出版した。

私は今韓国に伝えられている王朝絵画を学び、琉球絵画との比較をする作業体制に入るところであるが、今後どこまで遠方に行けるか予測できない状況にある。

（さとう ふみひこ／美術家、沖縄県立芸術大学、沖縄大学、非常勤講師）

## 琉球コスモロジーの再生

平川 信幸

琉球はかつて独自に国王を戴く王国であった。そして、琉球の国王は、いわゆる政治的な権力と共に宗教的な権威も兼ね備えていた。

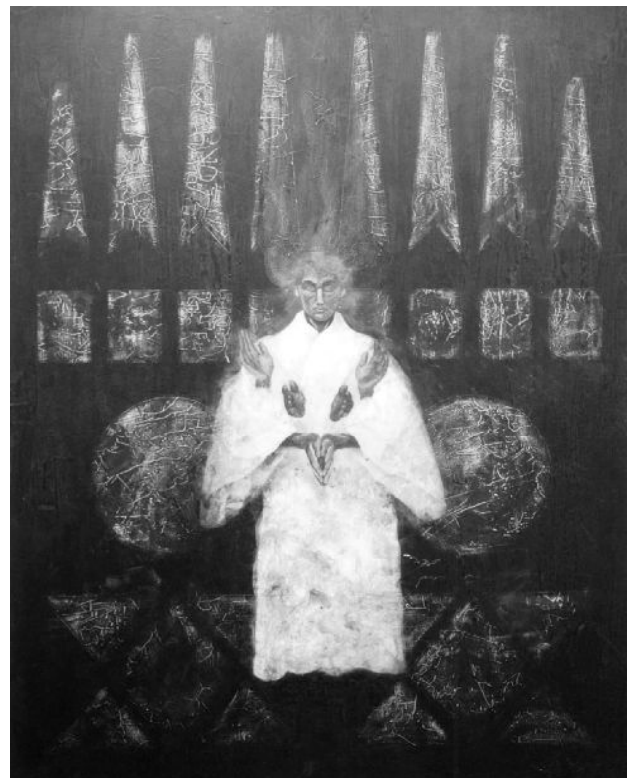
国家を最も大きなものとして人々の日常を支える共同体は、常に脅威にさらされており、脅威に対して対応しうる権威を人々は求めた。他集団との関係、外界からの物資と文化の調達・導入、自然の変動の予知と対応、共同体内での争いなどの課題を対処しうる超越的な権威が求め、つくりだされる。共同体の中心として諸課題に対処しうる権威とは、その共同体世界の全体性を代表するコスモロジー的権威、王権ということになるだろう。

王権の所有者は帰属する集団のもつ文化的背景によってその性質が異なるが、その源として共同体世界の主宰者、あるいは子孫としてその世界の営みを司った。

世界の営み、すなわちコスモロジーを儀礼や造形によって可視化し、その支配下の共同体に臨む宗教的権威を、王権の所有者は必然的にそなえていた。琉球国王もまた、宗教的権威をそなえ、独自のコスモロジーを可視化する存在であった。佐藤文彦氏は学生時代、伊平屋、伊是名、宮古、八重山をめぐる、古層を残す祭祀に触れたと述べている。佐藤氏が島々で遭遇した祭祀こそ、琉球のコスモロジーを可視化するために行われた儀礼の末裔である。

そして、御後絵もまた、琉球国王の持ちうるコスモロジー的権威、王権を備えた造形であったと理解される。明代に描かれた御後絵は中国皇帝よりおくられた皮弁冠服を着た国王を中心に儀仗を携えた家臣を左右に8名ずつ配し、背後には日月に青海波が描かれた屏風と、異国風の細々とした道具が棚に置かれている。清代に描かれた御後絵も同様に皮弁冠服を着た国王を中心に儀仗を携えた家臣を左右に7名ずつ配されている。国王のポートレートであれば、国王にせいぜい数人の家臣を配せばいいはずだが、御後絵には、多くの家臣を率い、中国の衣装を来た国王を中心に海洋をイメージさせる青海波に日月の配した屏風などが描かれている。恐らく、御後絵の図像には海洋国家、琉球のコスモロジーが詰まっているはずである。時間の渦に失われた御後絵の図像の読み解きは、美術史家や歴史家によって行われているが、満足いく答えはまだ出ていない。御後絵の謎に挑む研究者と同じように、佐藤氏もまた、御後絵に秘められた琉球のコスモロジーの魅力にとりつかれた一人だといえるだろう。ところで佐藤氏は自らの仕事を復元といわずに、再

生とよんでいる。ここに佐藤氏のアーティストとしてのこだわりが見える気がする。専門的な話になるが、文化財の世界で復元とは素材から技術・技法に至るまで、各分野のプロパーの調査や考証をもとにして行われる。それはDNAを解析して、作品そのものをつくりだすような作業である。対して、佐藤氏の仕事は図像の考証の上に、作家としての感性と創造性が入ってくる。復元は過去から現在へ、技術や素材など作品そのものを受けつぐことに重点を置くのに対して、佐藤氏の再生は過去の作品を、作家の技と感性でなぞることで、作品の持つ世界を未来へつなげることに重点を置く仕事だといえる。



「祈りーイザイホー」綿布・アクリル絵具・顔料・227×181cm 1992年

王国時代、御後絵は当時の画壇を代表する画家が描く、琉球絵画の集大成であった。御後絵をアクリル絵の具でなぞる佐藤氏の作業はまた、琉球絵画のエッセンスをなぞる仕事だともいえる。現代とは異なる人物描写、菊や唐草・龍など伝統的な東アジアのモチーフであふれる肖像画を、現在のうちなーんちゅはどのように感じるだろうか。国王の肖像画、御後絵を見て、何かを感じるのであれば、佐藤氏の琉球絵画のエッセンスをなぞる仕事は成功したことになると思う。そして、琉球のコスモロジーを現代に還元した新たな御後絵が出てくれば、再生は次のステージにうつっていくだろう。

(ひらかわ のぶゆき/美術史家)

## 矛盾と相克-佐藤文彦の仕事について-

### 与那覇大智

佐藤文彦の仕事は、遠望すると琉球文化の再生というまとまりある景色に見えるが、近づいてみるといくつかの矛盾を孕んでいる。その矛盾はしかし、彼の芸術を理解するうえで貴重な視座を与えている。以下、彼が創作した絵画作品と、御後絵の再生について検討したい。

まず絵画作品について。出品作の『祈り』と題された作品を見てみる。墓石の前の香炉に、髪を結いあげた女性が祈る姿がハーフミラー越しの像のように半透明に重ね合わせられている。画面は神秘的な空気で充満しており、女性はその豊かな闇に溶け込みそうである。しかし彼女の描かれ方に注目してほしい。面取りされたように立体的な面が強調された、確かなボリュームがある。薄暗がりの中に取り込まれるのに抗うかのように、個の存在を際立たせている。

沖縄の御嶽の持つ神秘性は、霊性を付与された特異な事物の存在というより、森の木々や湧き出でる泉や移ろう光が醸し出す、その場所全体の霊的な雰囲気によって感受される。その感受に忠実であろうとするなら、目の前の形象は、霊性の前に雲散霧消してしまうだろう。シャーマン的要素を追求しようとすれば、現実的な事物の把握から離れていくことが自然ではないか。しかし佐藤が描く事物は、いかに形象が神秘的奥行きの中に溶け込もうとしても、量感とそれが表す現実の3次元的空間の秩序を離れない。この相反する両者を抱え込んだ彼の作品の特徴は、沖縄芸大の卒業制作から近作まで、ほぼ一貫している。

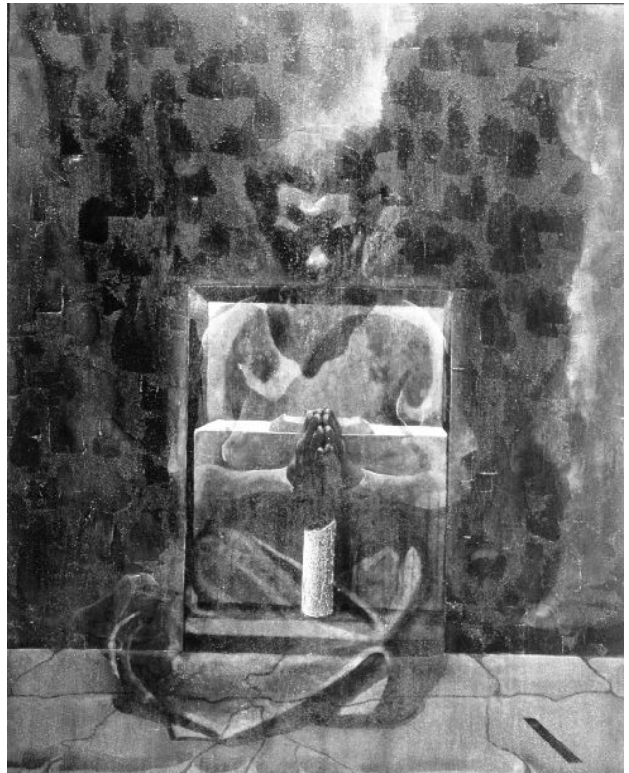
次に御後絵について。文化財の復元という観点から考えれば、重要なのは復元作業を挟んだ過去（原画）と現在（複製）の御後絵の同一性であり、描き手の意志や願望はあったとしても、それは復元の事業の背景に控えるべきものであろう。しかし、佐藤は自らの研究と実践を御後絵の「復元」ではなく「再生」という。どういうことか。彼の著書「遙かなる御後絵」から引く。

「このパフォーマンスは歴史的な資料を積み重ねたうえで「復元」ではなく、戦火で失われた沖縄の美を再びよみがえらせるための「再生」であった。制作にあたって、単純に模写する方法を選ばなかったのは内面的なかかわりを深めるためであり、またオリジナルに近い御後絵を描いておきたかったからでもある。」

ここで「内面的なかかわり」は、御後絵を生み出した当時の絵師の精神と自らの精神の交感を試みる意志として、「オリジナル」はそのような絵師の精神で新しい御後絵を自らの手で描いてみたいという野心の現れとみることができよう。実際、佐藤が最初に取り組んだ御後絵は、琉球王国最後の国王尚泰を描いた、歴史上には存在しない『最後の御後絵』であ

った。これは佐藤文彦オリジナルの作品である。

佐藤は御後絵再生において、絵師の魂と自分の魂を並べ沿わせようとしている。そうやって描かれた御後絵は、もはや推定復元された文化財の写しに留まらず、彼の内面で生きる琉球文化の象徴となる。彼の御後絵制作は、古の宮廷絵師と現在の芸術家はいかにして通底しうるのか、という大いなる試みなのではないか。



「祈り」綿布・タルクボンド・アクリル絵具116,5×91cm 1990年

佐藤文彦の造形的営みは、作品制作においては神秘性と写実性の、御後絵制作では文化財復元と自己の芸術家としての創造性という、混じり合わない両者の相克の中にあるように思えるのだ。そしてその相克は、彼の出自にもうかがえる。

佐藤は沖縄にルーツを持つ画家ではない。幼少時に沖縄に移住した、本土にルーツを持つ画家である。その彼が、沖縄の文化と精神の在り方に惹かれ、深く没入して再生させ、我々の目の前に示す。これ自体が逆説的だ。なぜなら、ウチナンチュ自身がそれを失いつつあるからだ。

現在の沖縄において佐藤の仕事に社会的意義を見るなら、それは古の琉球の文化が持っていた、広く他者に開かれた寛容の気構えと進取の気風を再認識させられることにあるのだろう。他者との断絶ではなくつながりを、対立ではなく融和を重んずるのが、海洋交易国家琉球の姿勢である。

この気づきは、佐藤文彦という画家によってもたらされた。彼がかつて、海の向こうからやってきた幼子であったのは、ある意味で象徴的である。

(よなは たいち/画家、沖縄県立芸大・横浜美大非常勤講師)

# FUMIHIKO SATO



## 佐藤文彦について

佐藤文彦氏は1966年東京生まれ。1973年両親とともに那覇市に移住し現在に至る。小学3年生から中学、高校と沖縄で過ごす。1990年に沖縄県立芸術大学美術学科絵画専攻を卒業し、東京藝術大学院美術研究科に入学。大学院においては「琉球の絵画様式」の研究に勤しむ。1992年同大学院美術研究科油画専攻修了し、同大学院美術研究科後期博士課程油画専攻にて、更に研究を深め、先の戦争で消失してしまった歴代の琉球国王の肖像画「御後絵」を鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』に納められたモノクロ写真（10点）から8点を再生し、その研究の現代的な意義が評価され同大学院博士号を取得している。以後、現在まで合計10点の「御後絵」を再生した。

幼少時の40年前に沖縄に移住して来た佐藤氏によって、現代美術の立ち位置から「琉球の絵画様式」という未開拓の地平の扉が開かれたことは、近代のアカデミズム（モダニズム）の美術文脈を主軸にして語られてきた今日の流れにあって、埋もれた文化、忘れゆく文化、消滅が危ぶまれる文化の古層に眼差し、その地中深く眠る精神文化を現代に再現したことは誠に意義深いアートと理解している。本誌GV紙の1項で佐藤氏自身が述べているように、大学院時代はモノクロ写真をなぞり・・・「時代錯誤」だ・・・「ぬり絵」だと笑われたと言うのだが、けしてそのように一笑にされる行為ではなく、「御後絵」の再生（再現）行為を通して琉球文化の古層を探る旅であり、アートアドベンチャーである。まさにクリエイティブなアーティストの現代への提示であると。

東京（外）からやってきた若者が美術家になり、琉球の歴史や、精神文化に敏感に反応し、地味ながらも確実に掘り起こしその意味の重要性、大切さを伝えている。地元の美術家は琉球の歴史や精神文化へのアプローチが十分だろうか、パラドックスな事だが佐藤氏の美術行為は琉球人の「主体」と「自覚」の気づきを促し、足下から発せられるリアリティーの伴った表現の原点を見る思いがする。戦後、今日に至るまで、なぜ地元美術家から佐藤氏のような仕事が発生しなかったのか。自問し、自省しなければならないだろう。しかしながら、地元美術家への一方的な批判や決めつけは出来ない。1872年の琉球国の日本併合、1972年の再併合（日本復帰）は日本文化の同化政策をもたらし、教育制度は琉球の文化歴史を否定はしないものの、日本史から除外された歴史教育を歩んだ。また、現在の沖縄県立芸術大学の美術工芸学部の教授陣もほとんどが日本本土出身者によって営まれ、同化政策の弊害や他者からの眼差しと中央思考、アカデミズムの範囲を超えられない。おそらく、その構図も大きな要因であろう。従って、排出された美術家たちの作品にも「場」のリアリティーや琉球の歴史と文化精神性が感じられるものが少なく、文化経済がグローバル化していく流れの現況も手伝ってか、「場」のリアリティーの自覚は薄らぐばかりである。

佐藤氏は1986年に創立した沖縄県立芸術大学の一期生である。奇しくも県立芸術大学の場所は140年前の琉球王国時代まで「貝摺奉行所」であった。県立芸術大学の眼の前には世界文化遺産となった首里城があり、その城壁が広く横たわっている。更に芸大の絵画科棟の前には「御後絵」が安置されていたという円覚寺の遺構が戦禍で破壊されたままの姿で今も残っている。現在では円覚寺総門は復元されたが、両脇にあった「仁王像」は復元されてない。首里城や周辺の大切な文化財や宝物など戦禍ですべてを失った。かつての風景を想像し、在学中の佐藤氏はどのように受け止めていたのだろうか・・・。また、芸大の近くには、首里城の地下に掘られた旧日本陸軍第32軍司令部壕の入り口が数箇所ある。戦争の弾痕が壕口のコンクリート壁に痛々しく刻まれている。その落差のある歴史的な環境は美術家佐藤氏の琴線に触れ、琉球の精神文化の旅へ向かわせたのではなかったのか・・・と勝手な想像をかきたてられる。

佐藤氏の「御後絵」再生行為は、あのとき、鎌倉芳太郎が体感した感動を「再現」によって追体験したいという現代の美術家の衝動が生み出した芸術行為と言えよう。今展で我々もその美術行為の恩恵を受ける機会に恵まれる事になった。改めて感謝したい。

（画廊主／上原誠勇）

# 佐藤文彦 (SATO FUMIHIKO)

(さとう ふみひこ / 美術家)

- 1966年 東京都生まれ  
1990年 沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術学科絵画専攻卒業  
1992年 東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻修了  
1995年 東京藝術大学大学院美術研究科後期博士課程油画専攻修了  
『「御後絵」(琉球国王肖像画) 再生の現在的意義』にて博士学位取得  
現在 沖縄県立芸術大学、沖縄大学 非常勤講師
- 2013年 文化庁新進芸術家海外派遣制度研修員として韓国ソウルにて1年間研修予定  
『朝鮮国王肖像画「御眞」描写技法修得による琉球国王肖像画「御後絵」の研究』(仮)

## 個展

- 1993年 琉球国王肖像画「御後絵」(那覇市民ギャラリー／浦添市美術館)  
1995年 東京藝術大学後期博士課程修了制作展(東京藝術大学資料展示館)  
1995年 『甦った琉球国王肖像画「御後絵」』展(沖縄通信博物館／宜野湾市立体育館)  
1996年 『遙かなる御後絵』展(リウボウサロン)  
2004年 いわて大沖縄博(「御後絵出品」、岩手産業文化センター・アピオ)  
2004年 『遙かなる御後絵』展(沖縄県立芸術大学附属図書館芸術資料館展示室)  
2005年 佐藤麗子・瑞慶山和子「ふたり舞」公演内特別展示(草月ホールロビー他)  
2006年 『遙かなる御後絵』展(沖縄県立南部医療センター内ギャラリー「和」)  
2008年 「史劇尚円王ー松金がゆくー」公演内特別展示(浦添てだこホール特設会場)  
2013年 佐藤文彦展「失われたものを求めて」(画廊沖縄)

## グループ展

- 1991～95年  
‘91 CHURA展(目黒区美術館・練馬区美術館、以降平成7年まで毎年出品。  
‘92、‘93／セシオン杉並、‘94／つくば美術館、‘95／那覇市民ギャラリー)
- 1993年 中日現代絵画展-東京藝大第7研究室・中國中央工藝美術學院交流展  
(北京・中國美術館)
- 1996年 「沖縄的色彩は存在するか」(沖縄県立芸大学芸術資料館展示室)  
1996年 沖縄県立芸術大学開学10周年記念教員展(沖縄県立芸大学芸術資料館展示室)  
1997年 沖縄・台湾芸術大学教師交流展(沖縄県立芸術大学美術学科・國立藝術學院美術系教師  
作品交流展、県立芸大学芸術資料館展示室)
- 1997年 「聖なるもの」展(沖縄県立芸術大学附属図書芸術資料館展示室)  
2004年 水の沖縄2004(辺土区公民館)

【パブリックコレクション】 東京藝術大学資料展示館「石の翼」